

昔、ひとりのスルタンがいた。彼は結婚し、可愛い男の子を授かった。彼は、邪視を避けるため、息子に外に出ることを禁じた。

ある日、息子は宮殿の階上において、子供たちが外で遊んでいるのを見て父親に言った。「僕は、ボールで遊んでいる子供たちの中の誰かと友達になりたい」。

スルタンは答えた。

「よく見てからお前が友達にしたい子を探しておいで」。

子供は様子を伺い、衛兵に子供のひとりを探しにいくよう頼んだ。

「僕の友達になってくれるかい」。

「いいよ」。

ある日、二人は食事を出された。スルタンは彼が忠実な友人であるかどうかを知りたかった。テーブルにはすべてが三人分置かれた。パンやバナナなどなど...。それぞれが自分の分を取り、一人分が残った。スルタンの息子は新しい友に、最後の分を取るよう言い、彼はそれを取った。スルタンの息子は父親を呼んで彼に言った。

「あいつは本当の友だちじゃない。あいつは2人分とったのに僕は一人分しか食べなかった」。

彼は友人を探し続けた。彼は他の男の子を見つけて、同じシナリオを再現した。

新しい友はまたしても二人分を食べた。

「相変わらずだめだ」。とスルタンの息子は言った。

彼はへこたれずに探し続け、新しい友を見つけた。最後の分を分ける時になって二人は口論になった。どちらも、残った分を食べるのはもう一人の方だと望んだのだった。友だちは泣き始めた。スルタンが来て何が起こったのかを尋ねると、息子の友人は答えた。

「彼は僕だけが残った分を食べるように言っているけど、僕はそうはしたくないんです」。

彼は、残りを二人で分ける考えを持っていたので、スルタンは言った。

「この子が、お前に必要な友だ」。

友人になってからその子は宮殿に滞在した。ある日、散策をしている時に一羽の鳥が友人に近づいて言った。

「スルタンの可哀想な息子。もしお前が馬で散策に出たら、彼は馬から落ちて死ぬだろう。それに、もしこのことを言ったらお前は石に変わってしまう」。

友だちは、今聞いたことと、何もできないことに胸が締め付けられて黙った。

散策に出かける前に、彼は自分の銃に玉を込め、逃げ出す馬に向かって引き金を引いた。スルタンの息子は怒って理由を問いただした。友だちは銃に玉が込められているのを知らなかったと言い訳をして謝った。彼は、鳥が言ったことについては沈黙を守った。

またある日、あの鳥が来て言った。

「スルタンの可哀想な息子。散策から帰ったら飲み物が出されるだろう。彼が飲む否や死ぬだろう。それから、もしこのことを言ったらお前は石に変わってしまう」。

友だちは、今聞いたことと、何もできないことに胸が締め付けられ、悲しくなった。

散策から戻り、飲み物が二人に出された。友だちはグラスを動かして、グラスは落ちて割れてし

まった。スルタンの息子は怒って言った。

「これじゃもう飲めないじゃないか」。

友だちはまた謝って黙っていた。

さらにまたある日の散策で、鳥が戻ってきて言った。

「スルタンの可哀想な息子。彼は結婚するが、婚礼の最初の夜に蛇が部屋に入ってきて彼を殺すだろう。もしこのことを言ったらお前は石に変わってしまう」。

友だちは、今聞いたことと、何もできないことに胸が締め付けられ、悲しくなった。

婚礼の夜、友だちは部屋に忍び込んで床の下に隠れた。スルタンの息子は彼に言った。

「もうたくさんだ。前は馬のことを許し、グラスについても許した。それなのにまた、僕の私生活を覗き見するのか」。

彼はスルタンを呼んで言った。

「友なんてもういません。僕が結婚したというのに、あいつは部屋に隠れているんです」。

スルタンは尋ねた。

「どうしようというのだ」。

「首を刎ねるべきです」。

「わかった」。

死刑の執行が立会い人に伝えられ、被告は発言を求め、許可された。

「僕は自分の行いの理由を述べますが、止めることは出来ないでしょう。馬での散策の日を覚えてますか？ 一羽の鳥が私に、もし君が馬に乗れば死ぬと告げたのです。」

この言葉の後に、かれの下半身全体が石に変わった。あつけに取られた立会人は、彼の変身を目の当たりにして、黙るよう命じた。彼は言った。

「できません。僕は全部話さなければ！ 君はグラスのことを覚えてますね。あの水は毒を盛ってあって、もし君が飲めば死んでいたでしょう」。

彼は腰まで変身した。スルタンの息子は、彼が真実を語っていることがわかってやめさせようとしたが遅すぎた。友だちはもう一度言った。

「何故僕が君の部屋に入ったかわかるだろう？ あの鳥が、君の婚礼の日に蛇がやってきて君を殺すと告げたので、僕は君を助けるために来たんだ」。

彼は話を終え、全身が石に変わってしまった。友を失って悲嘆にくれ、それでも石の塊を取っておいた。

ある日、散策の道筋で鳥が近づいて言った。

「お前は友のことで悲しんでいる！ その必要はない。お前の妻が子を産んだ時、子供の血を少し取ってそれで石の表面を磨けば、お前の友は元に戻るだろう」。

彼は喜んで家に戻ると、妻が出産するところだった。彼は短刀で彼の子供から血を少し取り、それを石の上に流した。彼の友は命を取り戻し、それからいつまでも友人のままだった。